『とはずがたり』における夢の諸相
――入胎夢のインキュベーション――
The Incubation of the Spiritual Dreams in *Towazugatari*, *the Confessions of Lady Nijo*

河東　仁
Masashi Kawato

<abstract>

In the later Kamakura Era, a woman wrote a diary with the title *Towazugatari*, which means "I will talk, although nobody asks me to." This book was translated into English by Karen Brazell in 1976――*The Confessions of Lady Nijo*, Stanford University Press.

The author, Lady Nijo (1258-?) was one of the consorts of ex-Emperor Gofukakusa (1243-1304). She gave birth to the child of the ex-emperor, but the boy died at the age of two. Then, she secretly delivered the babies of a young nobleman and a high priest. Because of this, her diary gives us a lot of information about the love-affairs of aristocrats in this period. In addition, Lady Nijo wrote down various interesting dreams in her diary and drew a vivid picture of some aspects of the dream-culture in the later Kamakura Era.

For example, when she got pregnant with the baby of the young aristocrat, Yukinoakebono, she dreamed that she put a small silver vase inside her breast pocket. Similarly, when she got pregnant with the baby of the high priest, Ariakenotsuki, ex-Emperor Gofukakusa saw in his dream that Lady Nijo put a silver *Goko*, the magical stick of esoteric Buddhism, inside her breast pocket, but he then confiscated this from her.

The main purpose of this report is to analyze why Lady Nijo wrote these curious dreams in her diary.

In conventional studies, these dreams have been interpreted as sexual dreams that suggest pregnancy; the vase symbolizes the vagina, and the *Goko* the phallus. However, Eastern dream-culture, as regards dream types suggesting pregnancy, had a special type of dream called *Nittaimu*, which means "something-entering-the-womb dream". This was thought to be a spiritual dream, and the baby born after this dream was believed destined to become a king, hero or supreme priest. In the case of a daughter, she was believed destined to become the mother of such a person. The concrete motif of the *Nittaimu* is like this; a woman (or her spouse) dreams that she swallows the sun, the moon, jewels or precious metals, and in

other cases, inserts such a thing into her breast pocket. As a result of this dream, she conceives a real baby.

Accordingly, we should consider the two dreams above as Nittaimu. These are never sexual dreams but spiritual dreams, at least in the dream-culture of this period. To prove this, however, we must check the correspondence between these dreams and historical facts.

The baby born to Lady Nijo after the vase-dream was a girl, and right after her birth the baby was hidden somewhere by Yukinoakebono. Four years later, Lady Nijo found out that the girl was being brought up as Yukinoakebono's own daughter, as if she had been born to his legitimate wife. About ten years later, the child got married to ex-Emperor Kameyama (1249-1305), Gofukakusa's brother. So, there was a chance for the baby born between them to become an emperor. Even if the baby was a girl, she had a possibility to become *Kokumo*, the Mother of Emperor.

Lady Nijo's baby after the Goko-dream was a boy and was hidden somewhere by ex-Emperor Gofukakusa right after his birth. However, Lady Nijo later found out that the boy was being brought up as Gofukakusa's own child, as if he had been born to one of his mistresses. Well, the Kamakura Shogun at that time was one of Gofukakusa's children, and his mother was another of Gofukakusa's mistresses. Therefore, although Lady Nijo's boy did not have the qualification to become an emperor, he had a chance to become the Kamakura Shogun.

Consequently, it is certain that the two dreams above were not mere sexual dreams but spiritual dreams, Nittaimu. And Lady Nijo's diary was the book for incubating these dreams. In other words, she tried to make the good luck, which these two dreams promised, come true by writing them down into her diary while praying.

As we know, Towazugatari was hidden in the depths of the Imperial Court's Library until 1938. When it appeared to the world once again, knowledge of the dream-culture in Japan had been lost, and the secret wishes of Lady Nijo could not be read correctly in conventional studies. An understanding of Nittaimu, however, helps us to see the spiritual nature of her dreams.

鎌倉時代後期の日記文学に、『とはずがたり』と呼ばれる作品がある。作者は、二条との女房名で後深草上皇（1243-1304）に仕えた女性（1258-？）である。本稿は、この書に数多く記された夢のうち、懐妊の予兆とされる三つの夢に焦点を当て、二条がこれらを日記に書き留めた目的・意図について考察しようとするものである。ただし考察を始める前に、この書全体について若干の説明をしておく必要があろう。

Ⅰ.『とはずがたり』とは

１．秘匿の書

『とはずがたり』は、南北朝時代に成立した『増鏡』に一部が引用されたとはいえ、その後は室町時代後期に三条西実隆が披見したとの記録があるだけで、長きにわたり名のみが知られる書であった。

この書が日の目を見たのは昭和十三年（1938）であり、山岸徳平（書誌学）が宮内省図書寮御文庫の地理部を整理中に、偶然発見したことによる。現時点で、テキストはこれ一本しか確認されていない。ただし戦国期に焼かれた古典籍などの元禄期における復本事業の一環として書写されたものであり、作者自身の手になる真筆本は未発見である[1)]。

このように長いあいだ秘匿されてきた理由として、実在した上皇や上級貴族たちの性愛の実態が赤裸々にさらけ出されているため、あるいは南北朝対立の淵源である、後深草院とその同母弟、亀山院（1249-1305）との緊張をはらんだ関係が如実に描き出されているため、との説が一般的である。

いずれにせよ、昭和二十五年に山岸の手で全巻が活字翻刻されたとはいえ、本格的な研究が始まったのは、松本寧至（国文学）による『とはずがたりの研究』（桜楓社、1971年）が公刊されてからのことである[2)]。

２．概略

かつて貴族階層の女流日記は、毎日の出来事をその日のうちに書き連ねてゆくのではなく、ある程度の歳月を重ねてから、過去を一気に振り返るといった形で執筆されるのが通例であった。そのため当然のことながら、日毎に書き込む日記以上に、脚色の入る余地が大きい。日記文学と呼ばれる所以であり、『とはずがたり』もその例にもれない。と言うより、上皇のみならず上級貴族や高僧との間に秘かに子をなした作者であるだけに、上皇以外の主要な人物名はすべて仮の名が用いられており、彼らとの間に起きたさまざまな出来事も意識的に年代がずらされたりぼかされたりといった、「朧化」策が幾重にも施されているのが本書の特徴である。

全体は五巻からなり、作者が14歳（数え、以下同）の正月から、49歳の秋までの出来事が記されている。このうち前三巻は女房時代の回想である。４歳のときから後深草院の御所で育て

1）正確には、室町期の文明年間（1469-86）に中山宣親と甘露寺元長なる貴族二人の手で作成された写本が、江戸時代初期まで禁裏に蔵されていたことが、大東急記念文庫の禁裏御蔵書目録から確認されている。また明応六年（1497）の五月に、後土御門天皇（1442-1500）の命で転写されて碩学の三条西実隆に校正させたことが『実隆公記』に記されている。しかし宣親・元長の手になる写本は、万治四年（1661）の内裏火災で焼亡、結局、御土御門天皇の命になる転写本が、元禄初期に霊元上皇（1654-1732）の命で復元された。しかしその親本たる実隆校正本もいつしか行方不明となっており、霊元上皇本のみが孤本として伝わっている―松村雄二『「とはずがたり」のなかの中世―ある尼僧の自叙伝―』臨川書店、1999年、5-7頁。

2）本稿ではテキストとして、三角洋一校注『新古典文学大系　とはずがたり』岩波書店、1994年に依拠する。

られてきた二条が、14歳のとき院と新枕を交わして女房勤めが始まってから、26歳のとき、院の正室の嫉妬などの理由により御所から追放されるまでの経緯が描かれており、便宜的に「宮廷篇」と呼び慣わされている[3)]。

これに対して後半は「紀行篇」と呼ばれるように、正応二年（1289）の二月後半、すでに尼となった作者が、32歳のとき西行法師に憧れて東国へと旅立つ記事から始まる。そして鶴岡八幡宮、善光寺[4)]、浅草寺などを参詣したのち帰洛の途につく。帰洛後も中宮寺、当麻（たいま）寺、聖徳太子廟、そして熱田神宮や伊勢神宮などへ精力的に参詣する。45歳になった時には西国への長旅を始め、厳島神社、さらには讃岐の白峰、土佐の足摺岬まで足を伸ばす。また48歳の時には熊野へと出立、那智大社にて今は亡き院と夢のなかで再会を果たす。そして徳治元年（1306）七月十六日に催された後深草院三回忌、およびその後日談を記して筆が擱（お）かれる。

３．時代背景

承久の乱（1221）以降、それまでの「公武二重政権」状態に終止符が打たれ、朝廷の勢力は衰亡の一途を辿っていた。ただし南北朝以降とは異なり、少なくとも皇室や上級貴族には広大な荘園が残されていた。このため朝廷の人間は、かつての華やかだった王朝時代の宮廷社会を偲び、和歌や王朝物語に熱中する、現実逃避的な生活に明け暮れていた。しばしば指摘されるように、公家の立場から書かれた歴史物語『増鏡』には、この時代最大の出来事である蒙古襲来についての記述がほとんどなく、代わりに、後嵯峨法皇（1220-72）五十賀（いそじのが）の儀が長々と記されている。

恋愛もきわめて遊戯化し、頽廃的なものとなっていた。その好個の例となるのが、夫婦の秘事を教わった乳母（めのと）、典侍（すけだい）大にその後も心を寄せつづけた後深草院が、紫上にちなんで、その娘――後の二条――を４歳のときから御所に引き取り、理想の女性に育て上げようとしたことである。王朝文学の最高峰をなす『源氏物語』は、この時代の宮廷人にとって生きるよすがとも言えるものだった。亀山院との緊張関係を緩和するための催しとして、『源氏』に描かれた六条院での女楽（おんながく）を後深草院が女房陣に演じさせたように、恋愛はもちろん、日常のさまざまな場面にて『源氏』の世界を模倣することに最大の喜びが見出されていた。

ところで後深草院は、三十年以上にわたって君臨した後嵯峨上皇の第三皇子として出生、寛元四年（1246）に即位した。４歳の幼帝である。だが病弱であったためか、同母弟への父院の偏愛により、11歳にて譲位させられている。亀山天皇の誕生である。しかも父院が崩御した文永九年（1272）にはすでに亀山帝の皇子世仁（よひと）親王が春宮（とうぐう）に立っており、その即位後――後宇多

3）正確には、28歳となった弘安八年（一二八五）三月二日、後深草院が立太子した皇子熙仁親王と催した連歌の会に呼ばれた際の記事が「宮廷篇」の最後である。

4）善光寺参詣に関しては、路程などをめぐって記述にかなりの誤謬があり、実際に行ったか疑問視されている。

天皇――には、上皇首座たる「治天の君」の座も弟院にとられてしまった。

しかし朝廷と幕府のパイプ役となる関東申次の任に当たっていた西園寺実兼（1249-1322）の尽力により、後宇多天皇の春宮として、後深草院の皇子熙仁親王が立太子する。後の伏見天皇である。そしてこれ以降、朝廷を一枚岩にさせず、かといって分裂もさせずという幕府の政策によって、いわゆる「両統迭立」が続くことになる。後深草院系が持明院統、後の北朝であり、亀山院系が大覚寺統、後の南朝である。

Ⅱ．宮廷篇の梗概――夢譚を中心にして

１．巻一（作者14-17歳）

後深草院は、４歳の時より御所にて育ててきた二条が、14歳の新春を迎えて美しく成長したのを見て、かねてからの思惑通り新枕を交わし、女房として後宮に入れる。二条の父久我雅忠（1223？-72）は村上源氏の直系にあたり、後嵯峨法皇のもとで大納言首席に昇進した人物である。しかし太政大臣にまであと一歩のところで法皇が崩御したため、気落ちして隠居してしまった。それゆえ本来なら皇后・中宮に次ぐ女御として入内するべき清華の家柄に生まれながら、女房クラスでの後宮入りとなった。だが、後深草院の寵愛ぶりに変わりはなく、15歳の六月には院の御子を懐妊する。

ところが二条には、幼馴染みで、院と結ばれる以前からお互いにほのかな思いを抱いていた、「雪の曙」――上述の西園寺実兼とほぼ同定されている――という男性がいた。そしてこの年の十月半ばのこと、里下がりして亡き父の喪に服しているとき、雪の曙が忍んできて、愛を訴える。彼女もその情熱を拒みきれず、ついに新枕を交わしてしまう。

二人の忍び逢いは、そのことが院の夢に見えはすまいかと恐れながらも、御子の出産後もつづく。そして16歳の十二月、まさに雪の曙と向かい合っているところへ、院より文が送られてくる。そこにはいつにも増して親しみの籠もった言葉がしたためられた後に、歌がこう記されていた（口語訳を注の形で付しておく[5]）。

他者の夢（1）

むば玉の夢にぞ見つる小夜衣あらぬ袂を重ねけりとは[6]

さてもその夜のこと、二条は次のことを夢に見る。

作者の夢③[7]

塗骨に松を蒔きたる扇に、銀の油壺を入て、この人の賜ぶを、人に隠して懐に入れぬと

5）口語訳するにあたって、久保田淳校注・訳『新編日本古典文学全集　とはずがたり』小学館、1999年を参照する。

6）口語訳―夢に見たよ、そなたが別の男と袂を重ねたということを。

7）夢に付された通し番号は、後述の表１による。

夢に見て、うちおどろきたれば、暁の鐘聞こゆ[8)]。

しかも不思議なことに、そばにいる雪の曙も同じ様を夢に見たという（二人同夢）。

そうこうするうち、翌年の二月末、懐妊の徴候があり、雪の曙の子であることは明らかだった。窮した二条は、あくまでも院の御子として装い、九月に女児を出産。院には月足らずの死産と伝え、その女児は顔も見ないうちに、雪の曙の計らいでどこか余所へ引き取られていった。しかしその罪の報いか、十月、前年に生まれた御子が夭折した。だが院の寵愛は変わることがなかった。

２．巻二（作者18-20歳）

建治元年（1275）三月のこと、後白河法皇の追善供養のさい、主宰する高僧――「有明の月」の仮名で登場する仁和寺の御室――が二条を見初め、純粋な人物であるだけに、執拗に迫ってくる。その場は何とか袖を振りきるが、同年八月、病床に臥した院の平癒祈禱のため、験力にたけた有明の月がまたもや召される。そして祈禱の道場のそばの局で強引に契りを結ばされた二条は、心ならずも、結願の日まで夜ごと逢瀬を重ねることになる。

建治三年の四月末ごろ、雪の曙の計らいで、彼らの間に生まれた女児の姿を垣間見て、ちょうど彼女が生まれたころに死産した、彼の正室の姫君として育てられていることを知る。

同年八月ごろ、「近衛の大殿」の仮名で記された人物――両院の摂政関白を務めた鷹司兼平（1228-94）――が息子への今様の伝授を、後深草院に請うてきた。しかし狙いは二条にあり、会場となった伏見の御所で、強引に結ばれてしまう。しかも院はそれと知りながら、止めようともしなかった。

３．巻三（作者24-28歳）

弘安四年（1281）ごろの二月、院の皇女である遊義門院の祈　のために有明の月が御所を来訪、今なお断ち切れぬ愛念を訴えてくる。しかも偶然それを院に立ち聞きされてしまったため、それまでの有明の月とのことを、洗いざらい告白せざるをえなくなる。だが院は、咎めるどころか、むしろ積極的に二人に逢瀬の機会を与えたりする。二条は戸惑いつつも、疎ましかった有明の月に、次第に愛情を覚えるようになる。

そして二月の半ば、後深草院が二条を有明の月のもとへ差し向けた翌朝、不思議な夢を見たと二条に告げる。

他者の夢（4）

> 今の、五鈷を賜びつるを、我にちと引き隠して懐に入つるを、袖をひかへて、「これほど心知りてあるに、などかくは」と言はれて、涙のこぼれつるを払ひて、取り出でたり

8）口語訳―骨に漆を塗り松の柄を蒔絵にした扇の上に銀の油壺を載せて、雪の曙から渡され、他人に隠して懐に入れたと夢に見て、はっと目が覚めると、暁の鐘の音が聞こえてくる。

つるを見れば、銀にてありける。故法皇の御物なれば、「わがにせん」と言ひて、立ちながら見ると思ひて、夢覚めぬ。今宵かならず、しるしある事あるらむとおぼゆるぞ。もしさもあらば、疑ふ所なき岩根の松をこそ[9]。

この夢の結果を確かめるため院は、一カ月ほど二条を召さずにいたところ、三月の初め、懐妊が判明する。有明の月の子であることは明らかだった。

同年十月、両院の母である大宮院の快気祝いの宴が催されたさい、お酌役として召し出された二条は、身重の体にもかかわらず、亀山院の意に従わされてしまう。

十一月六日に男児を出産するが、有明の月との噂を消すために死産と公表される。そしてちょうどそのころ、院の胤を宿した別の女性が実際に死産したのを公表せず、二条の子が彼女の実子として育てられることになる。

その後も有明の月の妄執はますます深まり、しげしげと二条のもとを訪れる。そして同月十三日の晩のこと、寝汗をおびただしくかきながらはっと目を覚まして、次のことを夢に見たと二条に告げる。

他者の夢（5）

我身が鴛鴦といふ鳥となりて、御身の内へ入と思ひつるが、かく汗のをびたゝしく垂るは、あながちなる思ひに、我魂や、袖の中とゞまりけん[10]。

そして同月十八日、有明の月は流行病に倒れ、「見しむば玉の夢も、いかなる事にか[11]」との文を二条に遺し逝去してしまう。悲しみに沈んだ二条は、四十九日の法要のため東山に籠もり、聖たちが夜もすがら法会をいとなむなか、聴聞所でうとうとしていた。すると、

作者の夢⑥

暁、ありしに変はらぬ面影にて、「憂き世の夢は長き闇路ぞ」とて、抱き付きたまふ[12]。

この後ひどく具合が悪くなったが、車の手配を取り消すのも面倒なため、予定通り都へ戻った。しかも乳母の家へ下がってからは、一時は水さえ受けつけない状態となった。そして三月も半ばを過ぎたころ、懐妊していることが判明する。あの暁の別れ以来、目を見交わした男性

9）口語訳―今のお方（有明の月）が五鈷を賜ったのを、そなたはわたしにちょっと隠すようにして懐に入れたので、わたしが袖を引っ張って、「これほど事情は呑み込んでおるのに、なぜそのような態度をとるのだ」と言うと、そなたはつらそうにして涙を振り払って懐から取り出したのを見ると、銀の五鈷だった。これは亡き（父の後嵯峨）法皇の御物なので、「わたしのものにしよう」と言って、立ちながら見たと思ったとき夢から覚めた。今宵きっとこの夢のしるしとなること（懐妊）があると思われる。疑いなくそなたが岩根の松をもうける（『源氏物語』にある歌で、他人の子を宿すとの歌意）のであろう。

10）口語訳―わたしの体が鴛鴦という鳥となって、そなたの体の中へ入ったと（夢の中で）思ったが、このようにひどく汗をかいたのは、あまりに思い詰めたため、わたしの魂がそなたの袖の中にとどまってしまったのだろうか。

11）口語訳―あのとき見た（鴛鴦の）夢も如何なる事を意味しているのだろうか。

12）口語訳―暁のこと、（有明の月が）生前と変わらぬ面影で、「憂き世のことは夢なのに、妄執を抱いたため、長い闇路をさ迷っているよ」と言って、抱きついてくる。

すらいないゆえ、有明の月の胤であることは確かだった。そして翌年の八月ごろ、無事に男児を出産すると、この子だけは自分の手で育てることにする。

しかしこの頃から、後深草院が次第に冷たくなってくる。原因は、有明の月の死をいつまでも嘆いているせいかと思ったが、実は、亀山院との噂が激しくなってきたためであった。そしてついに翌年の弘安六年（1283）七月、院は、かねてより彼女を嫌っていた正室である東二条院の訴えを聞き入れ、御所から下がらせてしまう。

弘安八年正月の末、太政大臣藤原実氏の室、北山の准后（じゅごう）の九十賀（くそじのが）に召され、久しぶりに後深草院や亀山院と逢う。後深草院は優しい言葉をかけ、帰参するよう告げるが、二条が応ずることはなかった。そして数年後の正応二年（1289）の二月末、都をあとにして東国へと旅立つ。

III.『とはずがたり』における夢の概要

１．夢の語義

表１は、本書に登場する「夢」なる語をすべて抜き出して筆者が独自に作成したものであり[13)]、全72例を数えることができる。ただし「夢に夢見る」という表現を２例と数え、「むば玉の面影」のごとく「夢」なる語を用いずに夢を指している箇所も８例載せてある。

ここで注意を要するのは、これらがすべて夜に見るいわゆる「夢」を指しているのではないことである。「夢」なる語は、きわめて多様な語義をもっている。そしてこの問題をめぐって、池田利夫（国文学）が次のごとく厳密な分類を提示している[14)]。

一類　狭義の夢を意味する用例。

二類　いわゆる「儚さ」を意味する用例。

三類　「夢の心地」「夢のやうに」といった具合に、「まことと思えぬ」心境を意味する用例。

四類　「ゆめにも」「ゆめに」のように、「少しも」「いささかも」といった否定を表す副詞句となっている用例。

五類　男女の逢瀬や契りを意味する用例。

そこで池田の分類を『とはずがたり』に当てはめると、表１のごとく一類――45例、二類――５例、三類――27例、四類――２例、五類――16例を数えることができる。ただし重複もあり、№11は意味不明である。ちなみに現代における今一つの語義、「希望」や「理想」はこの分類に含められていない。なぜならこうした用法は、わが国においては、明治期になってから

13）表のうち①から⑪は作者自身が見た夢、（1）から（6）は他者が見た夢であり、このうち幻覚様のものには②'のごとくダッシュを付してある。また「岩波」の欄は、『新古典文学大系』において当該箇所が登場する頁が記されている。なお〈　〉で括られているのは、「夢」なる語が直接記されていない箇所である。

14）池田利夫「浜松中納言物語の夢（上）―その語彙の頻度に就いて―」『芸文研究』第18号、1964年、8-9頁。

翻訳文学を通して根づいたものだからである。

２．二条における「夢」なる語の用いられ方

ところでこれらのうち五類に注目すると、興味深い事実が浮かび上がってくる。まず№１と№２であるが、これは二条が後深草院との最初の逢瀬を「夢」とみなしているものである。このとき二条は、それまで父とも兄とも慕っていた院から突然迫られ、驚きのあまり拒み通している。実際に契りが結ばれたのはこの翌晩のことであり、これ以降、院との逢瀬が「夢」と記されることはない。

次に雪の曙との逢瀬に関しては、唯一、№17の「やうやう見し夢の名残にや」が指摘されうるが、これは同時に先述した油壺の実夢をも指している。すなわち、二条が最初から心を寄せていた雪の曙との逢瀬には、基本的に「夢」の語が用いられていない。

これに対して近衛の大殿（おおいどの）との逢瀬になると、№36で「うたゝ寝にもあらぬ夢」〔うたた寝の夢と言ってすまされぬ出来事〕、№38にて「夢とだに猶分きかねて」〔夢かうつつかとも分からず……私の袖は紅の涙に染まった〕、№46において「ありし伏見の夢の恨み」と記されているように、この契りが二条にとって如何に意に添わぬものであったかが示唆されている。ちなみに№37は、同じく大殿との契りであっても、大殿から二条に贈られた歌に登場する語句である。

同様に№20から№23は、二条が女房の役目の一つとして手引きをさせられた、後深草院と前斎宮（さきのさいぐう）との契りを指すものであり、ここで前斎宮は憂き目にあっており、№30は御所に呼ばれながら恥を掻かされてしまった「ささがにの女」が悲しみと悔しさを込めて「夢」の語句を用いている箇所である。

それでは有明の月をめぐっては如何なる用い方がされているであろう。まず№27は、契りが結ばれる前に、有明の月から贈られた歌に登場する語句であり、最後の№54「見果てぬ夢」も有明の月の口から出た言葉である。これに対して二人の契りを二条の側から「夢」と記したものである、№40「見る夢の、いまだ結びも果てぬに」と№45「見し夢の名残も」では、ここではまだ有明の月の一方的な愛執に応ずる形での契りを指す語として用いられているとはいえ、「意に添わぬ契り」といった意味合いが薄い。ここには回想時における彼に対する二条の複雑な気持ちが反映しているものと思われる。

なお亀山院との契りをめぐって、五類の意味での「夢」の語が一切もちいられていないことも注目に価する。二条が御所を追放された理由の一つが、亀山院との噂が激しくなったことであったのを考えると、いわば緊張関係を緩和するための高級娼婦として差し出された身であったとはいえ、次第に深い情愛を覚えていったものと思われる。

それはさておき「夢」なる語の用法に関して、今一つ興味深いことがある。巻四以降すなわち「紀行篇」において、「儚さ」を意味する第二類、および「契り」を意味する第五類が登場しなくなり、大半が第一類の「実夢」それも内容の書き記された夢を意味するものとして用い

表１ 『とばずがたり』における「夢」の語一覧

	自	他	岩波			狭義の夢	はかなさ	夢のやう	ゆめにも	逢 瀬
1			7	巻一	人知らぬ夢にてだになくて					院
2			7		一夜の夢の、覚むる間もなく		○	○		院
3			10		〈結ぶほどなき短夜〉	○	○			
4			11		夢の名残も悲し	○	○			
5			29		夢ならではと悲しく			○		
6			34		御夢にや見ゆらん	○				
7			38		夢のゆかり		○			
8	①		44		〈むば玉の面影〉	○				
9	②’		44		〈昔ながらに変はらぬ姿にて〉	○				
10			45		夢沙汰にて、年も暮れぬる	○		○		
11			45		夢の疵（意味不明）					
12		(1)	45		むば玉の夢にぞ見つる	○				
13			45		さだかに見つる夢	○				
14	③	(2)	46		夢に見て（雪の曙と二人同夢）	○				
15			46		いと思かけぬ夢をも見つるかな	○				
16			46		去年の夢	○		○		
17			47		やうやう見し夢の名残にや	○				曙
18			53		憂かりし夢のゆかり			○		
19			58		夢の面影			○		
20			64		嵯峨野の夢の後は			○		前斎宮
21			64		よしなき夢の迷ひより					前斎宮
22			64		見し夜の夢			○		前斎宮
23			74	巻二	不思議なりつる夢とや言はん			○		
24			75		うつゝともなき面影を夢と思へば	○				
25			75		うつゝとも夢ともよしや	○				
26			77		「夢」と言文字を一書きて			○		
27			77		見果てぬ夢の末ぞゆかしき					月
28			78		見つる夢の名残も			○		月
29			79		うつゝとも夢ともいまだ分きかねて	○				
30			84		夢の通ひ路			○		ささがに
31	④’		86		〈まめやかに、有つるまゝの面影の、そばに見え給ぬる〉	○				
32		(3)	101		〈二の御殿の御前に、昔に変はらぬ姿にて侍と見て〉	○				
33		(3)	103		見しむば玉の夢の面影	○				
34			104		夢のやうなりし人			○		
35			106		夢の面影の人			○		
36			111		うたゝ寝にもあらぬ夢の名残			○		大殿
37			113		短夜の夢の面影さめやらで			○		大殿
38			113		夢とだに猶分きかねて			○		大殿
39	⑤		115	巻三	我ながら身を恨み寝の夢にさへ	○				
40			119		見る夢の、いまだ結びも果てぬに					月

	自	他	岩波			狭義の夢	はかなさ	夢のやう	ゆめにも	逢　瀬
41			119		又寝に見ゆる夢もなくて	○				
42		(4)	121		今宵、不思議なる夢をこそ見つれ	○				
43			121		夢覚めぬ	○				
44			122		ありし夢の後は	○				
45			122		見し夢の名残も			○		月
46			122		ありし伏見の夢の恨みより後は			○		大殿
47			125		ありし夢の事	○				
48			126		見しむば玉の夢をも思い合はせむために	○				
49			128		又寝の夢をだに	○				
50		(5)	141		〈我身が鴛鴦といふ鳥となりて、御身の内へ入〉	○				
51			142		見しむば玉の夢も	○				
52			143		夢に夢見るよりもなをたどられ			○		
53			143		〃			○		
54			143		見果てぬ夢					月
55			143		夢の心地して			○		
56	⑥		147		「憂き世の夢は長き闇路ぞ」とて、抱き付きたまふ		○			
57	⑦'		147		夢の面影、うつゝに車の内にぞ入らせ給たる心地して	○				
58			149		聞きし夢のまゝなるも	○				
59			172	巻四	夢にだに見ず				○	
60			174		夢結ぶほどもまどろまれず				○	
61		(6)	191		(春日)明神夢の内にあらはれて	○				
62			196		夢に夢見る心地して			○		
63			196		〃			○		
64			198		見しむばたまの夢の言葉	○				
65			224	巻五	今はと見つる夢ぞ悲しき			○		
66			225		夢ならでいかでか知らん	○				
67	⑧		225		夢に、日食といひて	○				
68			226		をのづから夢には見えよ	○				
69			227		夢やうに見まいらする			○		
70	⑨		236		〈昔ながらの姿、我もいにしへの心地にて、相向かひて〉	○				
71			236		言の葉はなを夢の枕にとゞまる	○				
72	⑩		237		一人の老翁、夢に示し給事ありき	○				
73	⑪		240		うちまどろみたる暁方の夢に	○				
74			241		夢の御面影も覚むる袂に残りて	○				
75			242		夢さむる枕	○				
76			242		かの夢の枕なりし扇を	○				
77			242		去年見し夢の面影	○				
78			244		見し夢も思ひ合はせられ	○				
79			246		夢の心地して			○		
80			248		〈見しむば玉の御面影〉	○				

られていることである。ここから、出家の身として男女の色恋を断ち、現世ことに華やかだった宮中時代を儚い「夢の世」とみなす。その一方で実夢のなかに神仏からのメッセージを読み取ろうとする宗教者の姿が浮かんでくる。

もちろん五類型への振り分けは非常に微妙なものが多く、表１は絶対的なものではない。しかしながら、大枠の傾向として、二条が「夢」なる語に対して、ある程度の意識的な使い分けをしていることが確認できよう。そこで次に、二条における夢との関わりをさらに見るため、「紀行篇」に目を移してゆきたい。ちなみに後半の特徴の一つとして、これ以降の記事は「刀にて破(や)られ」ているといった「切断注記」が、計四カ所に登場することが挙げられる。

Ⅳ．紀行篇の梗概

１．巻四（作者32-37歳ごろ）

尼となった二条は、東海道を下って熱田神宮に立ち寄ったのち、鎌倉に入る。そこで惟康(これやす)親王（1264-1326）が将軍位を廃されて京へ送還される場面を目撃、また村上源氏として幕府の要人たちと知り合い、後深草院の皇子久明親王（1276-1328）を新将軍として迎え入れる準備を手伝う。新将軍の到着は正応二年（1289）十月二十五日のことであった。

この年の暮れ近く、善光寺へお参りするつもりが果たせなかったことを残念がっていると、【ここで切断注記ⓐ――これより残りをば、刀にて破(や)られてし、おぼつかなう、いかなる事にてかとゆかしくて[15]】。

翌年、善光寺や浅草寺を参詣したのち、九月ごろ帰洛の途につく。帰京後、同年十月、ふたたび旅に出かけ、春日神社に詣でたのち法華寺を訪れ、さらに中宮寺や当麻(たいま)寺、聖徳太子廟などをめぐる。そして年が明けた二月ごろ、石清水(いわしみず)八幡宮に詣でたさい、ちょうど御幸していた後深草院と出逢い、一夜を語り明かす。

ついで熱田社に詣でるが、社殿の炎上事件に遭遇、宿願を果たせぬまま伊勢に赴く。そののち再び熱田社に出向き、宿願の『華厳経』書写を果たし、帰洛する。

２．巻五（作者45-49歳）

今度は西国への旅を志した作者は、乾元元年（1302）九月十二日、厳島神社に詣でる。そして四国へと渡り、讃岐の白峰に赴き、西行が崇徳院の御陵に詣でた昔をしのんだ後、土佐の足摺岬まで足を伸ばす。

帰洛したのちの嘉元二年（1304）六月、後深草院が重病との噂を耳にする。そこで七月一日、石清水八幡に参籠(さんろう)、院の延命を祈願する。すると、

15）口語訳―ここから残りは刀で切られており、はっきりしない。何故なのか知りたく思われる。

作者の夢⑧

五日の夢に、日食といひて、「あらはへ出でじ」と言ふ[16)]。【ここで切断注記ⓑ――本のまゝ。こゝより紙を切られて候。おぼつかなし。】

この夢に不安を覚えたためか、西園寺入道（実兼）のもとを訪ね、その計らいにより、「夢のやうに」院のお姿を拝する。しかし夢⑧を見た十一日後、院は崩御してしまう。十七日のこと、御所の前に終日たたずんでいた作者は、翌日の夜明け、葬送の車を裸足で追いかけ、泣きながら家へ戻った。

こうして院の四十九日も終わったころ、菩提を弔うため、日吉神社へ詣でる。ここはかつて義理の祖母（父方の祖母の後室）が「この御社にて、神恩をかうぶりける」と言いながらいつもお参りしていたところで、作者もお供をさせられて【ここで切断注記ⓒ――こゝより又刀にて切りて取られ候、返々（かへすがへす）おぼつかなし。】

これよりも前の八月三日のこと、父の三十三回忌を営み、墓所を訪れる。そして前年の『新後撰和歌集』から父の歌が漏れてしまい、具平（ともひら）親王より八代にわたって伝えられてきた久我（こが）家の和歌の伝統が絶えてしまうのだろうか、などと悲しみに暮れていた。すると七日目のこと、一人の老翁（柿本人麻呂の化身）が夢に示現されたことがあったので――作者の夢⑩――、その面影を絵に写し留め、また告げられた言葉を記し置いた。そして宿願が成就したら、この御（み）影（えい）の前にて人丸講の式を執り行おうと、御影と書き置いた言葉を箱の底にしまう。

嘉元三年九月十日ごろ、今度は熊野へ旅立つ。そして那智社に籠もり瀧の水で写経を始め、そろそろ終わろうとする二十日ごろ、懐かしい今は亡き院、およびその皇女遊義（ゆうぎ）門院と夢のなかで再会する――作者の夢⑪。だが帰洛すると、以前から病と噂されていた亀山院の崩御を知る。

翌年の三月初め、石清水八幡に参詣したところ、那智での夢のおかげか偶然、遊義門院の御幸に邂逅し、その後も音信が交わされる。

こうして同年七月十五日、後深草院の三回忌が営まれ、その後日談を記して筆が擱（お）かれるが、最後に切断注記ⓓが次のごとく記される――【本云〔私が借りている本に言うには〕、こゝより又、刀（かたな）して切られて候。おぼつかなう、いかなる事（こと）にかとおぼえて候】。

Ⅴ．人生後半の二条

１．切断注記問題

上述の梗概では作者が各地で詠んだ歌をすべて割愛したが、その歌を詠みながら諸国を行脚する姿から、『とはずがたり』研究の第一人者である松本寧至が、彼女を「女西行」と名づけた[17)]のも頷ける。しかし本稿は夢に焦点を当てるものであり、「紀行篇」に関しては、まず「切断注記」の問題に注目してみたい。

16）口語訳―五日の夢にて、「日蝕と言って、外へ出てはならぬ」と告げられる。

17）松本寧至『女西行―とはずがたりの世界―』勉誠新書、2001年。

そしてこの問題にきわめて示唆に富む指摘をしているのが、三田村雅子（国文学）である[18]。従来の研究では、これらの注記は作者自身の手になる文学的技法とされてきた。実際に切断されたというより、文学的な余韻をもたすため切断が装われたというのである。しかし氏は、切断箇所に「おぼつかなし」「いかなる事にか」などという思わせぶりな注記がなぜ付されたのか、その意味を改めて問う必要があり、ここには本来、社寺を参詣するなかで作者が感得した「神託」が記されていたのではと指摘する――「具体的には書かれないその『神託』が、いわば『とはずがたり』を支える影の部分をなしていて、二条のふるまいの常軌を逸した激しさと、執念の秘密を語りかけている」[19]。

すなわち、まず四カ所の切断注記は、いずれも直前に社寺参詣の記事がある。ⓐは、かねてよりの善光寺詣でへの希望が記された直後、ⓑは重態の後深草院のため石清水八幡に千度参りをして、日蝕を夢に見た直後、ⓒは日吉社に参籠して、院没後百日の供養をしている直後、しかもここには義理の祖母がこの社でしばしば神恩をこうむったことが記されている。最後のⓓは作品全体の末尾であり、この直前には那智社での夢の託宣が思い起こされている。またⓐでは異郷の鎌倉における自身の病、ⓑでは後深草院の重態、ⓒでは後深草院の崩御、ⓓでは亀山院の崩御といったように、いずれも作者が精神的に追いつめられた状況にある。それゆえここに、夢告（むごう）を含めた神仏からの託宣があってもおかしくない状況だというのである。

ちなみに切断注記の形ではないが、前半部でも、源氏の氏神である石清水八幡の門前で亡き父の姿を見ている――作者の夢①――のに、その具体的な内容が記されていない。そして「むば玉（たま）の〔夢に見た父の〕面影は、別（べち）に記（しる）し侍れば、これには洩（も）らしぬ」と記すことで、本書とは別に「夢記（むき）」の存在することが仄めかされている。また夢⑩では、作者が夢のなかで感得した柿本人麻呂の御影と託宣の言葉が箱の底に入れられており、同様に「夢記」の存在が示唆されている。さらに『新古典文学大系』は脚注において、№11の「去年の夢」をめぐって、後嵯峨法皇の一周忌前後ないしは亀山帝の後院設置のころ、皇統にかかわる夢見があった可能性を指摘している[20]。

しかしそれでは、後半部の切断注記部分には、如何なるメッセージが隠されているのであろうか。

２．巫女としての二条

ここで三田村が注目するのは、正応四年（1291）、34歳時に熱田神宮へ参詣した際の記事である。ここで作者は参籠中の二月二日、同宮の炎上事件に遭遇している。そのためいったん伊勢神宮へと赴いてから再度、再建中の同宮を参詣し、宿願の写経供養を果たす。ところがそのと

18）三田村雅子「後深草院二条―夢を生きる―」『国文学解釈と鑑賞』第六十四巻第五号、至文堂、1999年。
19）同論文、103頁。
20）三角洋一校注『新古典文学大系　とはずがたり』岩波書店、1994年、47頁。

き、焼け跡から錦の袋に入った古代の剣、およびこれが「草薙の剣」であることを記した縁起が発見されたことを耳にする。このこと自体は、社殿の炎上という大事件に直面した神官たちが、それを神宮自体の再生を象徴する出来事と解釈するなかで、新たなる縁起譚を作りだしたもの、と理解されうる。

だがそれはさておき彼女自身はここで、「自ら見しむばたまの〔夢の〕言葉思ひ合はせられて、不思議にも尊くおぼえ侍りしか」との感慨を記している。この「むばたまの言葉」の具体的な内容は不明であるが、ここにも「夢記」の存在がうかがわれる。

しかし三田村がより重視するのは、この事件が「神に選ばれた巫女としての二条の自覚を促すもの」[21] だったことにある。すなわち作者の父、久我雅忠は尾張を知行国とし、生前、熱田社の加護を深く頼んでいた。また死の直前、娘を託した後深草院に剣を贈っているが、それは承久の乱にて敗れた後鳥羽天皇から雅忠の父が拝領したものであり、まさしく朝廷の勢力回復への祈りが籠められた剣であった。そしてこの剣と、熱田社で発見された「草薙の剣」とが結びつくことで、天皇家を守りその再生を祈念する巫女としての自覚が確固たるものになったというのである。

その意味において、この前年のこと、作者が中宮寺、当麻寺、聖徳太子廟を相次いで参詣していることは興味深い。これらはいずれも、鎌倉新仏教の興隆に刺激されて、旧宗教が沸き立つように活性化していた場だからである。たとえば中宮寺にて作者が訪れた尼僧の信如房は、所在不明になっていた太子ゆかりの「天寿国繡帳」を夢告によって再発見したことで同寺中興の祖となった人物であり、夢に見た極楽浄土を蓮の茎から紡いだ糸で織りなしたのが当麻寺の「浄土曼荼羅」――「当麻曼荼羅」――なり、との中将姫伝説が語り出されたのもこの頃である。また太子廟からは、承久の乱が勃発する直前の不穏な雰囲気のなか、太子が夢にて未来を見通して記したという「未来記」が次々に出土している。

すなわちこうして旧勢力が再生を図ろうとする現場に触れるなかで、天皇家を武家から守り、再生を祈念する巫女としての使命を、作者は次第に確信していった。そして個人の家にまつわる霊夢であるなら、「夢記」に別記することで事足りる。しかし王権にまつわる霊夢は、その禁忌性ゆえに、人目に触れぬよう切断されねばならなかった。だがそこに「切断注記」が付されていることに、巫女として生きる作者の自負心が見え隠れしている。それゆえ『とはずがたり』は、「書かれざる『夢』のテクストとの対話構造、照応関係として読まれるべきテクスト」[22] なのだ、というのが三田村の主張である。

Ⅵ．三つの霊夢――油壺の夢、五鈷の夢、鴛鴦の夢

１．書かれし夢に隠されたメッセージ

21）三田村雅子、前掲論文、105頁。
22）三田村雅子、前掲論文、109頁。

以上の三田村説はきわめて鋭く、かつ示唆に富んでいる。ことに、『とはずがたり』は書かれざる「夢」を視野に入れながら読まれるべき物語であるとの指摘は、さまざまな朧化策を施されたこの作品を手にする誰しもが、納得することができよう。また先述したように、「紀行篇」に至って「夢」なる語の用法に変化が見られ、実夢のなかに神仏からのメッセージを読み取ろうとする方向が出てきたこととも一致する。さらには、人麻呂の御影を感得したように、作者自身に巫女としての素質が備わっていたことも確かである。

だがその一方で、果たして二条が「王権を守り再生を祈念する巫女」へと本当に変容したのかという問題は、切断された箇所の断簡ないしは作者自身の手になる真筆本、少なくとも別記された「夢記」が発見されでもしない限り、最終的な決着がつかないのも事実である。

そこで視点を変え、ここでは書かれし夢に注目してみたい。というのも、書かれた夢にも、『とはずがたり』に隠されたメッセージの一端を垣間見ることができると思われるからである。言い換えると、「宮廷篇」に記された三つの夢、③（2）油壺の夢、（4）五鈷の夢、（5）鴛鴦の夢に対する、当時の夢見文化に即した夢解きへの試みである。

2．性夢

従来の研究では、これらの夢はいずれも男女の交接を象徴する性夢であり、それゆえ懐妊の予兆夢であると解釈されてきた。たとえば松本寧至は、二条と雪の曙との逢瀬中に二人同夢の形で見られた、油壺の夢をこう読み解く[23]。

> ここで扇というのは、無意識のなかでは男性の象徴である。扇を御神体として祭る熊野那智大社の扇祭など諸国に扇神事はあるが、これらはみな男根崇拝が根本にある。油壺というのは髪油の瓶のようなものだが、このような容器が女性の象徴であることはいうまでもない。
>
> 要するにこの不思議な夢は男女交合の夢であるから、妊娠の前兆である。二人同夢であるから確実性がそれだけ高いことになるが、二人とも情欲を抑えることができないながら、またそれだけに、あぶない、あぶないと不安におののいていたわけである。

また『日本古典集成』の頭注では「いずれにしても性的な夢」[24]、学術文庫版の解説では「ここの夢は性的な関係を、象徴的にではあるがかなり露骨に表わしており、『人に隠して』というのは院に知られまいとする潜在意識を意味する」[25]、『新古典文学大系』の脚注では「懐妊を意味する性的な夢」[26]と説明している。そうしたなかで『新編日本古典文学全集』の頭注は、

23）松本寧至、前掲書、72頁。

24）福田秀一校注『日本古典集成　とはずがたり』新潮社、1978年、66頁。

25）次田香澄全訳注『とはずがたり　上』講談社学術文庫、1987年、185頁。

26）三角洋一校注『新古典文学大系　とはずがたり』岩波書店、1994年、46頁。

油壺を「胎児の象徴とも考えられる」[27] とし、以上とは意味合い（ニュアンス）を異にしているが、総じて深層心理学的な象徴解釈に終始していることには変わりがない。

もちろん扇が男根、油壺が女陰の置き換えであり、全体で男女の交接が象徴されているという指摘にはそれなりに説得力がある。たしかに扇に関して、閉じている場合ならともかく、この夢のごとく開かれているものを男根の象徴とみなすことに違和感が抱かれるのも事実である。しかしこの問題に関しては、吉野裕子（民俗学）が『扇――性と古代信仰――』[28] において、扇の原型は蒲葵（びろう）の葉にあり、葉の部分はいわば陰毛で、茎の部分が男根にあたることを鋭く解き明かしている。

それでは今一つの後深草院が見た五鈷の夢に関しては、如何なる説明がなされてきたのであろう。たとえば『集成』は「ここも性夢」[29] とし、学術文庫版は五鈷を「男性のシンボルの昇華した形」[30] とし、また『新日本古典文学大系月報52』では「院の夢もフロイトを地で行くかのように、有明が五鈷を二条に与えると、二条はそれを院に隠して懐に隠して入れた」[31] という形で、五鈷すなわち男根を二条が受け容れるという解釈がなされている。

ただし有明の月が見た鴛鴦（をし）の夢をめぐっては、多少趣の異なった解釈が施されている。たとえば『集成』では「オシドリ。夫婦なかのよい喩えにも用いる。ここは、作者が再び『有明の月』の子を懐妊したこと」[32]、学術文庫版では、「『をし』の『を』が男（をのこ）に通ずる」ゆえ男児出生の予兆夢とされ[33]、『新体系』では「作者が有明の子を懐妊する予兆を示すもの」[34] とみなされている。しかしこれらも基本的には、鴛鴦となった有明の月を二条が体の中に受け容れるという、性夢的な解釈が前提となっていることには相違ない。ただし『新体系』のみ、今一つの頭注にて、この鴛鴦が「遊離魂の俗信にもとづく」という指摘をしていることが注目される。だがこの問題については後述することにしたい。

すなわち以上のように、管見の限りであるとはいえ、ここには明記しなかったが紀要論文の範囲まで含めた従来の研究においては、これら三つの夢はすべて、男女の交接を象徴する性夢であり、それゆえ懐妊の予兆夢である、という解釈を基本線とするものであった。そしてこの解釈は、恐らく、深層心理学的には正鵠を射たものと言うことができよう。

だがしかし、文学作品を解釈する場合に重要なのは、そこに記された夢の無意識的な側面、すなわち夢の発生機制（メカニズム）はさておき、夢の意識的な側面、すなわち作者がその夢を記すことによ

27）久保田淳校注・訳、前掲書、253頁。
28）吉野裕子『扇―性と古代信仰―』人文書院、1984年。
29）福田秀一校注、前掲書、165頁。
30）次田香澄全訳注『とはずがたり　下』講談社学術文庫、1987年、49頁。
31）八嶌正治「頽廃の魅力」『月報52』岩波書店、1994年、１頁。
32）福田秀一校注、前掲書、190頁。
33）次田香澄全訳注、前掲書、138頁。
34）三角洋一校注、前掲書、142頁。

って何を言わんとしたのか、という問題にあることは指摘するまでもない。あるいは当時の文化的な文脈において、その夢が如何なるメッセージを持ちうるのかという問題である。そこで想起されてくるのが、懐妊の予兆夢の一類型をなす、「入胎夢（にったいむ）」という霊夢の存在である。

３．入胎夢

これは聖者や王者ないし英雄の誕生をめぐって、洋の東西を問わず語られてきた霊夢の一つである。ちなみに女児の出生をめぐって語られる場合には、その子が長じて聖者や王者の母となることの予兆とされる。具体的には、日輪や月輪（がちりん）、明星、剣、宝珠などを呑み込む、あるいは懐に入れる様を夢に見たのち懐妊する、というパターンのものである[35)]。

事実、我が国でも聖徳太子を筆頭として、空海・源信・法然・親鸞といった高僧、あるいは後村上天皇、さらには豊臣秀吉など枚挙に遑がないほどである[36)]。また入胎夢は、女性だけでなく受胎させる男性の側も同じ内容を見る、「二人同夢」の形をとる場合も少なくない。夢の霊性をより強調するためである。さらには受胎する女性でなく、男性のみが単独で見る場合もあるが、夢のもつ霊性には何ら変わりがない。入胎夢の役割は、聖者や王者の誕生を予示することにあるからである。

文学作品の上での入胎夢の見事な援用としては、『源氏物語』における明石入道の霊夢譚を指摘することができる[37)]。これは明石入道が、妻が子ども――後の明石君――を懐妊したとき見た夢であり、須弥山（しゅみせん）を入道が右の手に捧げており、山の左右からは、月と日の光がさやかに射し出で、この世を照らしているといった内容である。

ところでこの夢を紫式部が如何なる意図で物語に取り込んだのかは、直接的には記されていない。しかし文明四年（1472）に一条兼良が著した『源氏』の注釈書『花鳥余情』以来、月の光は娘が貴人と結ばれて産む姫君が中宮に立たれること、そして日の光はその姫君から生まれる若宮が春宮（とうぐう）に立ち、ついには天子の位につくことを意味する、入胎夢と解釈されてきた。実際、『源氏』の筋書きの上でも、その通りのことが展開してゆく。いわば明石入道は、若いころに見た霊夢の約束する未来を固く信じ、一生を夢の孵化（インキュベーション）・実現に費やすことで、ついに自分の血筋から国母（こくも）を出すという途方もない野望を叶えてしまった人物ということになる。

それゆえ以上から、作者の記した三つの夢も、単なる懐妊の予兆夢すなわち性夢の次元を超えた、霊的な入胎夢として捉えうる可能性がでてくる。そこで再度、それぞれの夢を当時の夢見文化や歴史的事実に対応させながら見てみよう。

35）関口忠男「前生・出生」伊藤博之他編『僧伝・寺社縁起・絵巻・絵伝』勉誠社、1995年、96-99頁。

36）拙著『日本の夢信仰――宗教学から見た日本精神史――』玉川大学出版部、2002年、228-231頁。

37）同書、184-187頁。

４．三つの霊夢

まず油壺の夢であるが、ここで重要なのは「銀の壺」を二条が懐に入れるモチーフである。扇はというと、貴族が他人にものを渡す際に直接は手渡しせず、開いた扇に載せて渡す役割のものにすぎない。ただし塗骨つまり軸に漆が塗られ、松の蒔絵が扇面に施されていることで、ここで渡されるものがきわめて貴重なものであることが示唆されている。そして「油壺」は、その容器という形状もさることながら、女性用の髪油の壺であることから、女児の誕生を予示する。それも単なる壺でなく銀製であることから、宝珠などと同様に、その女児がいずれ国母ないしは国母となる存在の母親になる、との吉兆ということになる。しかも二人同夢として記されることで、これが霊夢であることがより強調されている。こう見れば、この夢が入胎夢と呼ぶに相応しい要素を備えていることは明らかである。

そこで問題になるのは、歴史的な事実の問題である。上述したごとく実兼との女児は、彼の正室である顕子の実子として育てられたが、顕子所生とされる姫君は二人あり、そのうちの嬉子は伏見天皇の中宮として永福門院となり、今一人の瑛子は亀山法皇の寵愛を受け、昭訓門院となっている。このうち後者が二条と実兼の子と１歳違いであり、これは二条の朧化策によるものとして、彼女こそが油壺の子であった可能性が有力視されている[38)]。しかも亀山法皇は、晩年、昭訓門院を寵愛し、実兼の息子の協力のもと、二人の間にできた恒明親王を立太子させる寸前までいっている。ただしこの計画自体は法皇の崩御によって頓挫したが、複雑な両統迭立が続く状況においては、恒明親王の御子が立太子する、少なくともその姫君が国母となる可能性が少なからずあった。すなわち二条が『とはずがたり』を執筆した時点では、銀の壺の入胎夢がいつか実現することは十二分に期待できたことになる。

次に有明の月との長男であるが、この子どもに関しては、二条の手になる朧化策によって、その後のことはほとんど分からない。ただしこの子が後深草院の胤を受けた、恐らくは二条と同じ女房の一人の実子として育てられたことまでは、垣間見えている。これは、院が銀の五鈷を自分のものとして二条から取り上げたという夢の内容とも一致する。

ここから三田村は、宮将軍となった院の皇子久明親王が二条と同格の母からの生まれであることから、二条は我が子がいつか武家の棟梁たる宮将軍となり、皇室を守る存在となることを望んでいたと推測している[39)]。この推測は、五鈷なる法具がそもそもインド古代の武器であったことを考えると、きわめて魅力的である。あるいはまた法具そのままに仁和寺の御室や宮門跡となって、皇室を護持する存在となることを期待したとも想定されうる。

つまり以上二つの書かれし夢に隠されたメッセージとして、自分のなした皇子が夭折してしまったため自分の娘に国母になって欲しい、せめてその血筋から国母が出て欲しい、息子には宮将軍ないし宮門跡として皇室を護持する存在となって欲しい、という切なる願いが浮かび上

38）たとえば松本寧至、前掲書、74-75頁。

39）三田村雅子、前掲論文、108頁。

がってくる。

だがここで、鴛鴦の夢についても触れておく必要がある。これが従来の研究において指摘されてきたように、懐妊の予兆夢であることは否定できない。ただしこの夢によって生まれた男児をめぐって、何らかの高貴な存在となる可能性がまったく記されておらず、これが入胎夢として記された可能性はきわめて小さい。その一方で、『新古典文学大系』の頭注が「遊離魂の俗信にもとづく」と指摘しているように、ここには魂が小動物と化して体から遊離し、それが無事に戻った時には、その間の体験が当人に夢として感じられるが、脱け出したままになると死がもたらされるという、ソウル‐アニマルのモチーフがうかがわれる[40]。すなわち二条へのあまりの愛執のため、魂が体から脱け出してしまい、そのため有明の月に死がもたらされることの予兆、つまりは「死夢」である。言い換えると鴛鴦の夢は、入胎夢ではないが懐妊の予兆夢であり、同時に死夢でもあるということになる。

５．紫上から明石入道へ

以上、問わず語りに語られし夢のうちから二つの霊夢に隠されたメッセージを読み解いてきた。そこで最後に言及したいのが、巻五の冒頭に記された西国への旅立ちの場面である。ここで作者は、最初の目的地を安芸の厳島神社においている。そしてその途上、須磨と明石の地に立ち寄ったことを記す。ところがここからさほど遠くない地にある住吉神社については、まったく触れていない。実に奇妙なことである。というのも須磨は光源氏が流謫（るたく）の身を嘆いた地であり、いわばここで感得した霊夢に導かれるようにして明石入道の邸に迎え入れられ、さらに光をいや増す形で京の政界に返り咲くことになるが、これらの霊夢による導きは、源氏の君の住吉信仰による御利益とされているからである。

たしかに須磨と明石をめぐる記述には、光源氏および在原業平が須磨での流謫の境遇を嘆く気持ちに共感する言葉が記されている。しかし自身が一種の流謫の身にあった作者にしては、あまりに記述が素っ気なく、また住吉社への言及のないのが気になる。

そこで想起されるのが、上述の明石入道である。彼は、自らは俗世間から身を隠してしまい、自らの見た霊夢に秘かに一生を賭けつづけ、ついには自分の血筋から国母をというとてつもない願望を実現してしまった存在である。言い換えると作者は日記を執筆する段階で、流謫の身から見事に復活を成し遂げた光源氏や在原業平よりも、霊夢の孵化（インキュベーション）・実現に一生を費やした明石入道に自らの人生を重ね合わせていたのではなかろうか。

つまりは、紫上の化身として人生が始まった、より正確には化身としてこの世に誕生させられた二条が、いわば高級娼婦という政争の具として翻弄されながらも、主体的に生きる道を模索するなか、ついに同じく『源氏物語』に登場する明石入道の生き方を選び取ったということ

40）前掲拙著、4-5頁。

になる。

もちろんこれはあくまでも想像の域を出ることはない。しかし油壺と五鈷の夢が、背後に切なる願いのメッセージが込められた入胎夢として記されたことには、以上で見てきたように、かなりの蓋然性がある。そしてこのメッセージがこれまで見逃されてきた背景には、作者自身の手で施された幾重もの朧化策もさることながら、本作品が昭和十三年に発見されるまで宮中の奥深くに秘匿され、その間にメッセージを読み解くための夢見文化をめぐる基本知識が失われてしまったことが大きく関わっていたと思われる。

【付記】

本文を書き上げた時点で、独立行政法人東京国立博物館にて、本年の２月10日から２月29日まで、『亀山法皇700年御忌記念特別展　南禅寺』が開催されるとの報道に接した。

改めて記すまでもなく南禅寺は、三代将軍足利義満によって、京都・鎌倉五山の上にたつ寺格に列せられたものであるが、そもそもは、亀山上皇（1249-1305）が正応四年（1291）に自らの離宮を禅寺に改めたことに始まる。そして彼の遺した『禅林禅寺起願事』に、「利生ノ悲願化物ノ要怪也」すなわち「この世に生を受けたる者、他の存在を愛し慈しむ利他こそ肝要」との「利生の悲願」が記されている。そして伽藍がほぼ完成した嘉元三年（1305）九月十五日、それを見届けるようにして亀山上皇は崩御した。

もちろんこの悲願を、暴政にひたすらあえぐ一般民衆の実情を知らぬ、支配階層の戯れ言と云ってしまうことも可能であるが、この悲願自体に嘘偽りはないと思われる。

ところで本文では、霊夢に焦点を当てたため、二条の個人的な願望の析出に終始した。だが彼女と相対するなかで、次のような二条像が次第に浮かんできた[41)]。

確かに彼女の前半生は、政争の具として男性たちに翻弄されるものであった。しかし彼女はそうした境遇を経ながらも、個人的な願望を抱き続けると同時に、近衛の大殿をも含めた自分と縁のあったすべての存在、さらには有縁のみならず無縁の存在、そして有情のみならず無情の存在すべてを慈しみ愛する心境へと達していたのではなかろうか。もちろんこれは、彼女に接した男性たちの身勝手さを免罪するための弁ではない。『とはずがたり』の行間には、彼女の勝ち気な性格と並行して、無限とも言いうる優しさが溢れているように思われるのである。

さらに想像を逞しくすれば、そうした二条の思いが胤（たね）となって亀山上皇に宿り――入胎（にったい）し――、「利生の悲願」として言語化され、さらに寺院の建立という形で具現化されたのでは、と思われてならない。

だが現実は、その後、他ならぬ亀山上皇の孫である後醍醐天皇による討幕、南北朝の対立、

41）こうした二条像が筆者の心に焦点を結ぶにあたって、「日本人間性心理学会」の課題別自主研究会「心楽（こぐら）の会」にて本論文の構想を発表した際のご質問やご意見、およびその後にメーリング・リストを通して戴いたご意見やご指摘によるところが大きい。この場を借りて、会員の皆さまに心から御礼を申し上げる次第である。

応仁の乱、そして戦国時代と戦乱の世が途切れることなく続く。それどころか二十一世紀の今日になっても、この悲願は未だに達成されず、二条の前半生における悲劇も絶えることがない。二条と相対した者として、最後に、このような感慨を問わず語りに語らざるを得ない。